

日本疫学会

ニュースレター

平成12年12月31日発行 No.17

21世紀の医学を若き疫学者に託す

日本疫学会理事長 田中 平三

遺伝子レベルでの分析的研究が今世紀の医学の中心であったのは事実である。しかし、脳卒中、虚血性心疾患、がん等の主要死因による年齢調整死亡率の減少に遺伝子レベルの研究が寄与したとは言えないのも事実である。遺伝子研究費は疫学研究費の100倍いや1000倍以上に達しているのではなからうか？

臨床医学従事者も病者の癒しから離れ、動物実験や遺伝子解析に明け暮れ、インパクトファクター病に罹患している。単純な医療ミスの繰り返しは、国民の間で医師不信を醸し出している。

公衆衛生学と、公衆衛生活動に科学的根拠を与える疫学は、21世紀における国民の健康の維持増進、QOL向上に寄与することは確実であり、大きな期待も寄せられている。

しかし、現実をみても、必ずしも明るいものではない。医学部には、原則として衛生学と公衆衛生学の2講座が設置されているが、いずれかの教室は看板を残してはいるものの、内科学や分子生物学の植民地と化し、実際的には1講座となってしまう。いずれの医学部であっても、教授会での学位審査では、疫学論文に対して必ずといってよいぐらいに「否」が数票入れられる。公衆衛生専門の職業人（professional）養成を目的とした公衆衛生大学院（School of Public Health）

の設置は、社会的ニーズが大きいにもかかわらず、多くの大学では学内概算要求の段階でポシャッてしまう。

若い疫学者は、フィールド調査を避けるようになってきた。10年、20年という長期間のコホート研究は費用、時間がかかり、地域住民、行政機関、地元医師会等との折衝も煩わしいという。文献 review, meta-analysis 等は computer 相手で、自分1人で研究ができ、しかも、impact factor の高い雑誌に受理されやすいという。

日本疫学会は、創立10周年を向かえる。歴史の短い学会ではあるが、若い人々は、「カッコいい学会」という。日本医学会加入、MEDLINE に引用されている英文雑誌の刊行、ニュースレターによる会員間の情報交換、各種委員会活動、国際疫学会の誘致開催、等々である。しかし、会員数の伸び悩み、



企業からの賛助金皆無等のため、台所は火の車である。次期理事会では、思い切ったリストラが検討されなければならない。

平成12年10月、個人情報保護基本法に関する大綱が示され、平成13年3～4月頃には法制化されるという。若手の疫学者が中心になって、いわば自主規制の形で、インフォームド・コンセントのあり方等が検討されてきたし、私は、個人情報保護法制化専門委員会のヒアリング、厚生省の疫学的手法を用いた研究等における個人情報の保護等の在り方に関する専門委員

CONTENTS

21世紀の医学を若き疫学者に託す 田中 平三 1	会員からの声 小さなフィールドから 疫学会の編集員の先生方へのお願い 鷲尾 昌一 4
若手疫学者の独り言 G. Rose 先生と政策疫学と 個人情報保護基本法制 水島 春朔 2	掲 示 板 学会のご案内 5 理事・理事長選挙結果 7 功労賞受賞者 7 奨励賞受賞者 8
海外疫学事情 20th Annual Epidemiology Summer Program に参加して 村上 義孝 田中 隆, 山本博司 3	事務局だより 8 事務局の移転

会で、疫学の公益性を、すなわち疫学が人々の健康維持増進と疾病予防にいかにか寄与してきたかを説いてきた。基本法の適用除外を求めるために、日本疫学会に倫理委員会、衛生学公衆衛生学教育協議会に個人情報保護に関する委員会、そして、遅ればせながら日本学術会議第7部に小委員会を設置した。しかし、個人情報保護基本法制に関する大綱では、基本原則はいかなる分野にも適用されることとなった。個人情報取扱事業者の義務等は、報道分野に適用されないととなり、そのなかで、かろうじて、学術の分野も、政府の立案過程において、報道分野に準じて適切に調整する必要があるとされたので

ある。いわば自主的な取組で、個人の自己決定権および個人情報保護等に十分な配慮をして、疫学的研究を実施していく方策を考えてきたのではあるが、法律家は「疫学は、人間の尊厳に対する配慮不足」とし、次第に疫学研究に足枷をはめてきているように思われてならない。私の僻み根性が出てしまう話ではあるが、.....

疫学には、分子生物学のような独創的な、画期的な華やかさはない。文化勲章やノーベル賞とも縁遠い。臨床医の治療に対しては、たとえ最悪の転帰となっても、患者は主治医に深く感謝の意を表す。疫学が脳卒中、虚血性心疾患、がんのリスク軽減に寄与したと

いっても、誰にも感謝されることはない。しかし、疫学には長年にわたる地道な積み重ねがあると誰もが追いつけないような凄味がある。治療医学から予防医学へ、予防医学から健康増進へ、cure から care へ、病気の治療から患者の癒しへ、単なる余命延長から QOL 重視へ、環境汚染防止からアメニティ amenity 創造へ、このような時代の要請にこたえられる真の基礎医学が疫学である。人間を分子という物質としてみるのではなく、人間を人間としてみよ、人間をまもる科学が疫学である。若き疫学者が、このことにロマンを抱き、21 世紀に活躍されんことを祈念する。

若手疫学者の独り言

G. Rose 先生と政策疫学と個人情報保護基本法制

東京大学医学教育国際協力研究センター

水嶋 春朔

故 Geoffrey Rose 先生（ロンドン大学）は、Jeremier Stamler 先生（ノースウェスタン大学）らと、世界の循環器疫学研究者の憧れの「循環器疾患と疫学・予防医学に関する Ten Day Seminar」（国際心臓病連盟、疫学・予防医学部会主催）の創設から携わった教育者として有名で、わが国にも Rose 先生から薫陶を受けた多くの先生方が活躍しておられます。

1990 年、東西ドイツ統合の年に東ベルリンで開催された第 23 回 Ten Day Seminar に、当時大学院生だった私は、家森幸男教授の推薦により参加する幸運を得て、日本からのもう一人の参加者の内藤義彦先生（大阪府立成人病センター）をはじめ 20 ヶ国からの 30 人の若手循環器疫学研究者と一緒に歴史的、魅惑的なヨーロッパの一夏 2 週間をすごしました。なぜ歴史的かということ、ひとつには 1990 年が東西ドイツ統合という歴史的な年であったこと、もうひとつには Rose 先生が参加された最後の Ten Day Seminar だ

ったということ。なぜ魅惑的かというと、本物だけが解き放つスピリット溢れるじわーと芯深く効いてくるメッセージが、講義中や食事中あるいはティーブレイク中、とにかく四六時中、心地よいシャワーのように身体を包み込んで、ランナーズハイのように夢心地だったということです。

その後 1995 年にロンドン大学（Paul Elliott 教授）に留学する機会を得て、Rose 先生の遺作 The Strategy of Preventive Medicine (Oxford University Press, 1992) に出会い、帰国後、曾田研二教授、田中平三教授に監訳の労をおとりいただき翻訳出版（「予防医学のストラテジー：生活習慣病対策と健康増進」医学書院、1998）して、2 年半で 4 版を重ねさせていただきました。実は少々難航した翻訳出版への原動力は、1990 年 8 月のあの 2 週間に私の脳内レセプターに結合して離れない「疫学は政策に寄与すべきである」という Rose 先生のメッセージにあったと思っています。10 年たって、よ



うやく Rose 先生がおっしゃっていた Public Health Epidemiology の意味が理解できたような気になり、Evidence-based Health Policy とは、Rose 哲学を具現化するためのわかりやすいシステムと解釈すればいいと思っています。

「個人情報保護基本法制に関する大綱」（2000 年 10 月）に基づいた法案が、21 世紀最初の年である 2001 年の通常国会に提出（3 月頃？）されますが、疫学研究と個人情報保護の問題への緊急対応（まだ終わっていません！）も、疫学研究と公衆衛生政策をきっちり結

びつけるための基盤整備として重要な課題と思っています。

2001年5月には、国際心臓病連盟、疫学・予防医学部会主催の国際予防心臓病学会(ICPC)(会長:尾前照雄先生)が大阪で開催され、ポピュレーション・

ストラテジー理論の後継者であるKT Khaw教授(ケンブリッジ大学)によるG.Rose記念講演があります。このときには、個人情報保護基本法が国会で制定されている見込みです。「個人情報取扱事業者の義務」は医学研究、

疫学研究に対して免除になるのか? 21世紀の疫学の明暗はあと数ヶ月で決します。G.Rose先生は、どんなアドバイスを下さるのか、天国にe-mailを送ってみたい心境です。

海外疫学事情

20th Annual Epidemiology Summer Programに参加して

大分県立看護科学大学健康情報科学研究室

村上義孝

大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学

田中 隆, 山本博司

Epidemiology Research Institute(以下ERI)主催のサマープログラムに2週間(2000年7月17日から28日)参加いたしましたので、その様子と内容についてご紹介いたします。

ERIは疫学研究を実施する他、テキストブックの出版、雑誌Epidemiologyの編集にあたるなど、疫学に関する幅広い活動しております。本サマープログラムもERIの活動の一環であり、ERIがNew England Epidemiology Instituteという名で活動を始めた



1981年より開催されており、今年で20回を数えるものです。昨年までは大学の構内で開催されていたようですが、本年度はボストン郊外南(電車で30分)のNorwoodにあるホテルが会場でした。ERIに宿泊の希望を出した受講者も同ホテルに宿泊することになりました。会場となったホテルはリゾート型ホテルでサービス、食事、部屋と申し分ありませんでした。ただホテルから駅まで徒歩30分、電車は1~2時間に1本とボストン市内へのアクセスが悪く、ヨーロッパなどからの参加者から不評だったようで、来年度同ホテルで開催されるかは微妙なようです。

コースの内容として、疫学、生物統計学、SASに関する入門コース、ケースクロスオーバー研究、経時データ解析、生存時間解析などを含む中級・上級コース、ヘルスサービス、費用効

の英語圏、オランダ、北欧諸国などのヨーロッパ、さらにアジアより韓国から1人、日本より5人とさまざまな国より参加されていることが印象的でした。現在の所属も大学院生、製薬企業、

医師、政府機関などさまざまであり、性別も男女同数もしくは女性が多いくらいで、(調査したわけではないのですが)年齢も幅広いようでした。

サマープログラムの各コースは午前の部、午後の部、夜の部の3つに分かれており、1日3時間、月曜から金曜の5日間(夜の部は日曜から木曜)

果分析、薬剤疫学のコース、その他遺伝疫学、産業疫学、食物とがん、HIV感染の疫学など特定トピックのコースなど24コースありました。各年でコースの内容に若干の違いがみられるようなので、受講を予定する場合、確認をとる必要があるでしょう。以上、ERIの活動や出版物、サマープログラムの内容と担当講師名などの内容はホームページに詳細に記載されておりますので、興味のある方はそちらを参照してください。(URLアドレス <http://www.epidemiology.com>)。本サマープログラムの参加者は、アメリカ本国はもとよりカナダ、オーストラリアなど

の時間割になっています。講義のスタイルは大体1時間半講義して、15~20分コーヒープレーク、そしてまた講義というスタイルが一般的なようです。

これより筆者が受講した授業の一部を紹介いたします。KJ Rothman教授の疫学のコースは"Principle of Epidemiologic Study Design"と"Epidemiologic Data Analysis"の2コースに分かれております。両コースともRothman教授の書かれた"Modern Epidemiology"の第1版がもとになっていると先生自身おっしゃっていました。コースのために書かれた資料をもとに、OHPを用いながら説明すると

いう講義で、講義の合間に質問を受けるといったスタイルでした。アメリカ人以外の学生を意識してか、Rothman 教授の英語もゆっくりで、使用される単語もシンプルでわかりやすかったです。講義以外のホームワークとして論文を読んで、設問に回答する問題が毎日出されました。このホームワークをもとに次の日の講義がなされるという形式でした。またコーヒープレークの前に講義内容の理解を確認する4択問題が出題され、コーヒープレーク後に内容の確認をするという、授業の理解に対する配慮がなされていました。コースの内容を羅列しますと、"Principle of Epidemiologic Study Design"では Introduction, Causation and scientific inference, Measure of disease frequency, Measure of effect, Types of study, Precision in study design, Validity of study design, "Epidemiologic Data Analysis"では、Principle of data analysis, Analysis of crude data,

Stratified analysis, Evaluation of interaction, Analysis with matched data, Multivariate analysis, Multiple exposure levels となっており、上述いたしました"Modern Epidemiology"の第1版と同様の配列と内容となっていました。セミナーの合間にスウェーデンから来た方が「自分の国では、疫学の原理と方法の2つが十分には教育されていない。だから我々はこのセミナーに参加し、Rothman 先生の講義を聞くのです。」と言っていました。我々も同感でありました。もっと多くの日本人が本セミナーを受講し、疫学の原理と方法の発展に寄与できたらと感じました。

ホテルで開催されたためか、セミナーとしてはいささか高級感あるものでしたが、参加者はみなフランクで講師の先生と会食をしたりすることもしばしばありました。セミナーの期間は、学問的な点も含め、いろいろな意味で刺激を受けたと思います。短期ではあ

りますが、海外(とくにアメリカ)でどのように疫学が教えられているか/学ばれているか知るのが大変有意義なセミナーだと思いました。セミナー内では海外の人々と交流を深めるため、日本人同士でも英語で会話していました。そのため、英語漬け、疫学漬けの日々を送っておりましたが、セミナー最後の晩、ようやく、この閉じこめられた環境から解放された我々はレストランで無事終了を祝って祝宴をあげました。その際、参加した我々が、皆同じ気持ちをもち今後も交流を深めつつ、お互いに努力していこうと決意いたしました。

セミナー主催者も本セミナーにいろいろな国から出席されることを希望しているようで、日本でも宣伝してほしいといわれました。この文章が本セミナーに参加を希望している人の参考になれば幸いです。

会員からの声

小さなフィールドから疫学会の編集委員の先生方へのお願い

九州大学予防医学専修生 鷲尾 昌一

疫学会雑誌 (J Epidemiology) の編集委員の先生方のご指導を受けてもう10年になろうとしています。臨床医であった私が疫学を続けてこられたのは吉村健清先生、古野純典先生をはじめとする産業医科大学臨床疫学、九州大学予防医学の先生方のご指導のおかげであります。臨床の教室と疫学の教室の両方の先生のチェックを受けながら、論文を書いているとそれぞれの教室の指導医の先生方の意見が分かる事もありましたが、私が未熟なためにそれぞれの先生にきちんと納得いただくように説明出来ず、「最終的な判断は編集委員の先生の裁定をお願いします

しょう。」ということもありました。そんな時も編集委員の先生はわかりやすいコメントを下さいましたので、私なりに論文を訂正して掲載していただくことができました。なかには、もう一度カルテを見直してデータを拾い直すように言われる場合もありましたが、決して「この部分が不足しているのでリジェクトする。」というものはありませんでした。「データを拾い直して、再解析しなさい。」といったどのようにしたら掲載出来るかを教えて下さるものでした。おかげさまで J Epidemiology に多くの論文を掲載させていただくことができ、評議員にさせていただいたばかりか、疫学会の奨励賞もいただくことが出来ました。これは

ひとえに皆様のご指導のたまものです。

最近になって、今度は逆に私がフィールドを持つ先生方の共同研究者として、論文の指導をするようになりました。フィールドをもっていらっしゃる先生方はご自身の近くに研究の対象者を持っていらっしゃると思いますが、その数は多いものではありません。しかし、一人一人の様子は手に取るようにわかります。小さな数ですが、以前に私が小さな数の患者さんのデータで論文を書かせていただいた時と同じようにご指導をお願いいたします。私自身が未熟できちんとしたお手伝いが出来ないために未熟な論文になってしまっている部分もあります。対象者数が小さい

からといって門前払いするのではなく、現場の医師や保健婦が投稿した論文をどのように訂正すれば内的妥当性願いたいと思います。
のある良い論文になるのかをご指導お

掲 示 板

第11回日本疫学会学術総会および 第8回日本疫学会セミナーのご案内

- 1 期 日：2001年1月25日（木）
・26日（金）
- 2 会 場：つくば国際会議場
〒305-0032 つくば市竹園 2-20-3
TEL:0298-61-0001, FAX:0298-61-1209
- 3 会 長：嶋本 番
（筑波大学教授 社会医学系）
- 4 メインテーマ：
「社会とともに進む疫学」
- 5 学術企画
- ◆会長講演：
「社会とともに進む疫学—脳卒中の疫学研究と予防対策を振り返って—」
1月26日（金）9:30～10:00
座長：田中 平三（東京医科歯科大学難治疾患研究所）
- ◆特別講演：
「米国における循環器疾患の疫学と公衆衛生戦略」
Aaron R.Folsom（ミネソタ州立大学 公衆衛生学疫学部門教授）
1月25日（木）10:00～11:15
座長：上畑鉄之丞（国立公衆衛生院）
- ◆シンポジウム：
「学際科学としての疫学」への期待と提言
1月26日（金）10:00～12:00
座長：吉村健清（産業医科大学）
磯 博康（筑波大学）
『学際科学』としてみた疫学の可能性—栄養学を例として—
佐々木敏（国立がんセンター研究所 支所臨床疫学研究部）
「看護学における質的研究と量的研究の接点—事例研究から疫学研究へ」
牧本清子（大阪大学医学部保健学科）
「臨床の実践と研究における疫学」
川村 孝（京都大学）
「社会学・心理学分野における新しい解析手法：疫学研究への応用可能性」
小林晋一（科学警察研究所）
- ◆一般演題
・示説討論：中会議室 201・202
1月25日（木）14:30～15:40
26日（金）13:30～14:40
・口演（20題）：大ホール
1月25日（木）15:50～17:50
26日（金）14:50～16:50
- 6 運営議事および関連行事
・理事会：1月24日（水）18:00～
八重洲クラブ
・評議員会：1月25日（木）9:20～
10:00
つくば国際会議場 大ホール
・総 会：1月25日（木）
11:20～12:00
つくば国際会議場 大ホール
・懇親会：1月25日（木）
18:30～20:00
筑波第一ホテル
・日本疫学会奨励賞受賞式・受賞講演
1月25日（木）13:30～14:30
つくば国際会議場 大ホール
「日本における2型糖尿病発症と高血圧の危険因子：大阪ヘルスサーベイ」
林 朝茂（大阪市立大学大学院 医学研究科都市医学）
- 「中国江蘇省の上部消化管がんの危険要因に関する比較疫学研究」
嶺崎俊郎（愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部）
「わが国における脳卒中の疫学的研究」
山海知子（筑波大学社会医学系 地域医療学）
「わが国の栄養モニタリングの疫学的手法に関する研究」
吉池信男（国立健康・栄養研究所 成人健康・栄養部）
- ・第6回疫学の未来を語る若手の集い
2001年1月26日（金）17:10～19:00
つくば国際会議場 小会議室 405
- ・第8回日本疫学会セミナー
2000年1月27日（土）9:30～15:30
つくば国際会議場
「疫学と Evidence-based Public Health」
- 7 創立10周年記念公開講座
2001年1月24日（水）10:00～16:00
浜離宮ビル朝日ホール（東京）
- 8 学術総会事務局（代行）
〒105-0012 東京都港区芝大門 2-3-6
大門アーバニスト 401
ブランドゥ・ジャパン内
第11回日本疫学会学術総会事務局
TEL:03(5470)4401
FAX:03(5470)4410
e-mail: ekigakkai@plando.co.jp

第3回アジア・太平洋地域国際疫学会の御案内

開催日：2001年9月3日（月）
 ～5日（水）
 会場：産業医科大学
 ラマツイーニホール
 〒807-8555
 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 会長：吉村 健清
 産業医科大学 産業生態科学研究所
 臨床疫学 教授
 公用語：英語
 参加登録費：30,000円（2001年5月
 31日まで）
 35,000円（2001年6月
 1日以降）
 参加費振込先：
 西日本銀行 産業医大出張所
 普通 0023385
 口座名：APEPI2001事務局吉村健清

抄録締切：2001年3月31日（土）
 奨学金応募締切：2001年2月28日
 （水）
 テーマ：アジア・太平洋地域における
 疫学と健康開発
 トピックス：下記疫学分野
 (1)エイズ、(2)結核、(3)感染症、(4)
 悪性新生物、(5)循環器疾患、(6)脳血
 管疾患、(7)糖尿病、(8)精神保健、(9)
 歯科保健、(10)暴力、(11)喫煙・飲酒、
 (12)栄養、(13)運動、(14)行動、(15)
 環境、(16)産業、(17)プライマリヘ
 ルスケア、(18)民族、(19)災害、(20)
 女性の健康管理、(21)母子保健、(22)
 老人保健、(23)人口問題、(24)臨床疫
 学、(25)薬剤疫学、(26)遺伝・分子疫
 学、(27)健康情報システム、(28)健康
 政策、(29)スクリーニング、(30)健康

教育、(31)ヘルスプロモーション、(32)
 疫学教育、(33)疫学における倫理、(34)
 疫学方法論、(35)生物統計、(36)そ
 の他

なお、当学会の趣旨として、発展途
 上国からの疫学者をできるだけ多く招
 待したいと考えておりますので、皆様
 方のご支援をお願い申し上げます。

学会事務局：
 〒807-8555
 北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1
 産業医科大学 産業生態科学研究所
 臨床疫学教室内
 Tel: 093-602-5552, Fax: 093-603-0158
 e-mail: aepi2001@azul.med.uoeh-u.ac.jp
 URL: http://www.epi.med.uoeh-u.ac.jp/AP
 EPI2001

第5回国際循環器病予防会議 “21世紀の戦略と実践”

2001年5月大阪で開催

第5回国際循環器病予防会議事務局長 児玉和紀

第5回国際循環器病予防会議（The
 5th International Conference on
 Preventive Cardiology:5th ICPC）開催の
 ご案内は前回も掲載させていただきましたが、改めて疫学会会員の皆様に案
 内させていただきます。

この会議は、世界心臓連合の疫学予
 防専門委員会が中心になって4年に一
 度開催されてきていますが、第1回の
 モスクワ会議から第4回のモントリオ
 ール会議までいずれも北米とヨーロッ
 パで開催されてきましたので、アジア
 ・太平洋地域では初めての会議となり
 ます。また今回はThe 4th International
 Heart Health Conference (4th IHHC)が
 合同で開催され、さらに日循協総会（日
 本循環器病予防学会）も同じ会場で並
 列で開催されます。循環器疾患予防に
 関するあらゆる側面が討議される多彩

な会議になると思われまますので、多数
 の会員の皆様のご参加を期待していま
 す。

21世紀の最初の年に予防の実践を
 念頭においてこの会議を日本で開催す
 ることは極めて大きな意義を有してい
 ると考えられますので、多数の会員の
 方々の参加を希望しています。

なお、会議の詳細については事務局
 にお問い合わせください。

会議の概略は以下のとおりです。

[開催日時] 2001年5月27日（日）
 ～31日（木）

[開催場所] 大阪国際会議場

[会長] 尾前照雄（国立循環器病
 センター名誉総長）

[後援] 日本疫学会、WHO、厚生省、
 その他多数

[メインテーマ] 21世紀の戦略と実践

[会議内容] 心臓病、脳卒中、高血圧、
 高脂血症、糖尿病、肥満、その他、循
 環器疾患予防に関するあらゆる領域に
 ついて、特別講演、シンポジウム、教
 育講演、口述発表、ポスター発表、ラ
 ンチョンセミナー、サテライトシンポ
 ジウム、市民公開講座などが企画され
 ています。

[同時開催学会] The 4th International
 Heart Health Conference (4th IHHC)

日本循環器管理研究協議会（日循協）
 総会（日本循環器病予防学会）

[学会事務局] 第5回国際循環器病予
 防会議

〒106-0041 東京都港区麻布台2-3-22
 一乗寺ビル

株式会社コンベックス内
 電話:03-3589-3355, FAX:03-3589-3974

理事，理事長選挙の結果

理事選挙管理委員会

9月に行われました理事選挙において、次の15人の評議員が当選し、次期理事に就任することを承諾されました。(敬称略)

《北海道・東北》定数2

久道茂(東北大学大学院医学系研究科)、深尾彰(山形大学医学部公衆衛生学)

《東京》定数4

田中平三(東京医科歯科大学難治疾患研究所疫学)、渡辺昌(東京農業大学農学部栄養学科)、稲葉裕(順天堂大学医学部衛生学)、山口直人(国立がんセンター研究所がん情報研究部)

《関東》定数2

中村好一(自治医科大学公衆衛生学)、津金昌一郎(国立がんセンター研究所支所臨床疫学部)

《中部》定数2

徳留信寛(名古屋市立大学医学部公衆衛生学)、田島和雄(愛知県がんセンター研究所疫学・予防部)

《近畿》定数2

大島明(大阪府立成人病センター調査部)、上島弘嗣(滋賀医科大学福祉保健医学)

《中国・四国》定数1

能勢隆之(鳥取大学医学部公衆衛生学)

《九州・沖縄》定数2

吉村健清(産業医科大学臨床疫学)、

古野純典(九州大学大学院医学系研究科)

また、この中から互選により能勢隆之先生が次期理事長として選出されました。任期は2001年1月の会務総会から2004年1月の会務総会までです。(ただし、久道先生におかれては、2003年1月までの任期となり、後任として次点の辻一郎先生(東北大学大学院医学系研究科)が2004年1月の会務総会まで理事に就任することとなります。)

第1回日本疫学会功労賞受賞者

日本疫学会創立10周年を記念して、功労賞の授与を行うこととし、その細則を以下のように定めた。

日本疫学会功労賞に関する細則

日本疫学会会則第一章第4条6項に基づいて、日本疫学会功労賞に関する細則を定めるものである。

第1条 日本疫学会は「日本疫学会功労賞」を設ける。

第2条 日本疫学会功労賞受賞者の被推薦資格は次の要件の全てを満足するものとする。

- 1 疫学に関して顕著な学術的業績を残した者
- 2 疫学に関して、後進の教育、指導に功績のあった者
- 3 本学会の学会長、理事長、Journal of Epidemiology 編集委員長として、本会の発展に尽力した者。または、本会の推薦を受けて、国際疫学会(International

Epidemiological Association)の会長、理事長、理事、地域評議員、アジア・太平洋地域国際疫学会会長として、国際疫学会の発展に尽力した者。

第3条 日本疫学会功労賞受賞者の推薦に当たっては、理事会において功労賞受賞者の推薦担当理事3名を互選し、理事長が委嘱する。

1 推薦担当理事は功労賞受賞の該当者の有無及び該当者の被推薦資格基準(前条)に照らし、必要な調査を行い、その後、厳正に審査し、受賞者を選考する。委員長は、選考の結果を毎年8月31日までに理事長に報告するものとする。

2 理事長は、委員長からの報告を理事会に諮り、受賞者を決定する。

第4条 表彰は毎年日本疫学会総会において行い、受賞者には賞状等を贈呈する。

付：原則として、日本疫学会功労者受

賞者推薦担当理事は、名誉会員推薦担当理事を委嘱された者とする。

付則：本細則は、2000年1月29日から施行する。

本細則にしたがい、第1回日本疫学会功労賞候補者として、以下の先生方を推薦することが承認されました。(敬称略、50音順)

青木國雄(創設準備委員長、国際疫学会理事長・学会長)

飯田稔(第5回学術総会会長)

稲葉裕(第7回学術総会会長)

大野良之(第9回学術総会会長)

小町喜男(第1回学術総会会長)

重松逸造(国際疫学会理事)

富永祐民(第6回学術総会会長)

能勢隆之(第10回学術総会会長)

久道茂(第4回学術総会会長)

廣畑富雄(日本疫学会理事長、第2回学術総会会長)

柳川洋(日本疫学会理事長、第3回学術総会会長)

2001年日本疫学会奨励賞受賞候補者

2001年日本疫学会奨励賞受賞候補者として、以下の4名を推薦することが承認されました(敬称略、50音順)。

・山海知子(筑波大学 社会医学系 地域医療学)

受賞課題:「わが国における脳卒中の疫学的研究」

・嶽崎俊郎(愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部)

受賞課題:「中国江蘇省の上部消化管がんの危険要因に関する比較疫学研究」

・林朝茂(大阪市立大学大学院医学研究科都市医学講座)

受賞課題:「日本における2型糖尿病発症と高血圧の危険因子:大阪ヘルスサーベイ」

・吉池信男(国立健康・栄養研究所 成人健康・栄養部)

受賞課題:「わが国の栄養モニタリングの疫学的手法に関する研究」

事務局だより

(1) ホームページをご覧下さい

第2回理事会が10月18日に前橋市で開催されました。本学会のホームページ(<http://www.soc.nacsis.ac.jp/jca/>)に議事録を掲載しておりますのでご覧下さい。また、その他の情報についても、その都度アップしてまいりますので、ホームページのチェックをお願い致します。

(2) 事務局移転について

次期理事と理事長(鳥取大学医学部 能勢隆之教授)が選出されました。これに伴い理事会の承認のもとに事務局移転の作業をできるところから進めております。新しい事務局は次のとおりです。

〒683-8503 鳥取県米子市西町 86
鳥取大学医学部公衆衛生学教室内
日本疫学会事務局

TEL:0859(34)8026

FAX:0859(34)8085

事務局長:黒沢 洋一

2001年1月の会務総会終了後に正式に移転いたしますので、これ以降の

連絡は新事務局をお願い致します。

(3) 2001年度会費の納入について

日本疫学会の会計年度は1月1日から12月31日までです。年が明けると新年度となりますので、2001年度の年会費納入をお願いするところですが、事務局移転に伴い、納入先の郵便口座が変更となります。新口座が決定いたしましたら、郵便振替用紙をお送り致しますので、よろしくお願い致します。また、このニュースレターを送付した封筒に貼付している宛名シールには、2000年度までの会費納入状況が記載されています。未納金のある会員は、速やかに全額お支払いいただきますようお願い申し上げます。また、記載された金額に疑問点などがありましたら、早めに現事務局までご連絡願います。

(4) お礼

1999年7月から事務局を担当させていただき、至らぬ点もあり、会員の皆様にご迷惑をおかけしたことを

も多々あったことと思いますが、皆様のご支援のもとに、次の事務局に引き継ぐこととなりました。次期事務局もご支援下さいますよう、お願い申し上げます。

日本疫学会事務局

(2001年1月の会務総会まで)

〒162-8636

東京都新宿区戸山1-23-1

国立健康・栄養研究所

成人健康・栄養部 気付

事務局長:松村 康弘

事務職員:高橋 博子

TEL:03-3203-9194

FAX:03-3203-5605

日本疫学会ニュースレター編集委員会 委員長

松村 康弘 国立健康・栄養研究所
成人健康・栄養部

委員

磯 博康 筑波大学 社会医学系
菊地 正悟 愛知医科大学
公衆衛生学教室

坪野 吉孝 東北大学医学部
公衆衛生学教室

中井 里史 横浜国立大学
環境科学研究センター

本田 純久 長崎大学医学部
原爆被災資料センター

横山 徹爾 東京医科歯科大学
難治疾患研究所・疫学

編集後記

本ニュースレターが、私たち編集委員会の最後のニュースレターです。

多くの会員の皆様からのご協力により、何とか6号分(12号から17号)

を出すことができました。会員各位のご支援に対し編集委員一同心よりお礼申し上げますとともに、日本疫学会のますますの発展を祈念致します。